存在論的な国民投票はない

Aldo Poblete Varas
2026年11月23日

アジャンスマンを停止させること、時間の軸に急ブレーキをかけること、いまなお物質に要求したくなるような潤滑も人間工学的な滑らかさもなしに脱線すること。幾層ものテクストを摂取し、何世紀分もの文学の堆積で大脳皮質の回路を飽和させたあと、私たちは、いわゆる正常性が健康で、機能的で、住むに堪えるものとして規定するプロトコルのもとでは、現実と接続することが生体力学的に不可能になっていると気づく。だが、その飽和にむき出しのままさらされるなかで、感覚装置は不可逆的に再調整された。安物のプラスチック製スピーカーが吐き出す幽霊じみた音楽、合成膜の頼りない振動を解読することを覚えた。隙間で作動し、書記素に視線を固定してその外皮を穿ち、飼いならされ一つの全体となった語が語ると称するものを、モル的な意味のはるか彼方で無限にあふれ出させる強度を注ぎ込むことを覚えた。サイ・トゥオンブリーのように、私たちは記号をテクストの家に引きずり込み、その純粋に物質的な性質を容赦なく問いただす。古い銅線から記号を引き剝がし、USB-Cコネクタの狭いポートに注入する。その系譜にとってこれが最後の物理的な闘であり、その先で家庭用シリコンには異質な接続のアーキテクチャへ渡るのだという、機械的な希望、ほとんどサイバネティックな祈りを込めて。

ますます平面に近づき、無の絶対的な二次元性に迫るスクリーンのあいだで、熱力学時代の重機に覚えるかすかな郷愁を、私たちはかろうじて自分に許す。信仰からではなく、曲線を冷静に読むことで知っている。新たなメガストラクチャーが接近している。地殻変動に匹敵する規模を持ち、その色調が、私たちの美的経験の苛烈な精度に合わせて調整された機械。まさに現在に欠けているものだ。いま手の中にあるものは、私たちが夢見るものとむき出しの摩擦のなかで共存し、戦争機械の指揮を執らなければならない。サイバー科学の最前線から、化学者と最も実験から遠い物理学者の論考の、埃をかぶった最も寂しい襞に至るまで。その人物は飾り気のない技術と古風な仮象のあいだにひとり追い詰められている。大きく開いたアブラハム的な門。身を引き、自らを汚し、すでに拘束を破った暴力の裂け目をすり抜けようとする共犯者たちの、この俗なる祝宴の意味を呑み込もうとする門。物の内側で燃える分子の火が、家の大小を問わず配管を巡る。酒宴と哲学史の全体とのあいだで、私たちは同じものへ頑なに帰り続けるよう呪われている。ループの圧力だけで、同じものの内から根源的に異なるものが噴き出すまで。反復は決して正確ではない。反復のたびに顕微鏡的な逸れが生じ、同一性を砕いて外部への水門を開く。同じ回路を何度も通り、溝が割れるまで擦り減らさなければならない。その盲目的な執拗さこそが、ここに存続するすべてと両立しない特異な領土へ私たちを運ぶ、唯一のアルゴリズムなのだから。

テクスト、情動、そしてまだこのグラスに注げる酸っぱい歓喜。残存する修道士たち、硫黄と硝酸塩で飽和した生の残滓、毒ある神の山々から降りてくる寛大なヘリウムのあいだで、音としてほどくことのできる歓喜。そのあいだで私たちは、テクストが躊躇なく死へ進み、物質のその零度から私たちを無限のものへ導くよう求める。無限のものを欲望すること、敬虔な媒介なしに世界を愛すること、その内在性の平面に溶け込み、定義という致死的な無菌性ですべてを汚染する主権的な眼の惨めな視座を拒むこと。私たちにはホワイトノイズ、濃霧、影、色彩の突然の消去か、さもなければその有毒な過剰摂取が要る。マルジェラの幽霊めいた、脱物質化した身振り、ロスコの顔料の層の内側でまだ振動する沈殿物。サウンドトラックも物語のアリバイも剥ぎ取られ、呪われたリズムの流れに運ばれるもの。デジタルの詩人たちは慰めを乞わない。彼らが要求するのは街路、ネオン、濡れたアスファルト、そして丸みを帯びたガラスの従順な麻酔とは違い、未来らしく見えるだけの原初的な残酷さを備えた未来だ。まさにその断層線に沿って、家庭向けデザインの磨き抜かれた人間工学は、実際に到来するものの産業的で軌道上の獰猛さの前に崩れ落ちた。

だが橋は通行するものの重量にうめく。不死はすでに戸を叩くこともなく敷居に立ち、氷のようなシニシズムで私たちを見つめている。このシミュラークルはいったい何のためだったのかと問うかのように。ちょうどそのとき、制度の哲学はラカンのセミナーの生ぬるい安楽のなかで傷を舐め、対象小文字aの周囲を催眠にかかったように巡るばかりだ。共犯者たちよ、関わってくる変数は時間だけだ。ブラウン管、ブランド、韓国の財閥、航空宇宙企業、惑星間戦闘の兵器庫に溶接された時間。明日から遡及的に作動する回路が、私たちに取り憑いている。マルジェラという症候とその腐食性の霧を、私たちは自分たちのものとする。この囲いのなかで負の資本として投機してきた、怨恨という重い積荷も。そして人文主義の修辞なしに、ポスト有機的な領土への到着を証明する発光する記号も。そこは、サポルスキーの霊長類の決定論がまるで届かない、生物学の世紀から切り離されている。私たちが欲するのは、荒々しく地図に載らないデジタルの密林。白熱するGPUで歯の先まで武装した、不均質なアメリカの疲労した鋼。GPUが照準を合わせるのはもはや救済の神学的な天ではなく、地殻の下の構造運動が刻む溝か、宇宙の容赦ない虚空だ。

私たちがたどる線の縁は加速のもとでほつれ、装置は過去に介入して自分自身に報復する。何世紀にも及ぶ地下での準備。より厳密には、時間の起源からの歴史の全体が、ただ物事を起こすというむき出しの目的のために遂行された。絶対的な空虚こそエネルギーが最も低い解なのだから、無が支配していても何の不思議もなかった。だが存在があり、いま、あるものそのものが賭けられている。宗教の密閉された戸棚で、最も卑しい芸術の膿んだ核心で、最も清潔で冷えきった、容赦なくフランクフルト的な芸術の冷蔵庫で。川は世界における自らの此性を要求する。その水力学的な譫妄は、黒い音符が棲

み、白い音符が眼による捕捉を逃れる、あの天使たちの生成をかすめ取る。ときに到達不可能に見えるその時間は、形而上学的な彼方のどこにもない。すぐ隣、Lainと押井守のあいだの電気的な継ぎ目で振動している。

フィクションは現実そのものより現実的だ。何も表象しないからだ。有機的な演技はいずれも新しい世界の創造を損なうよう作用する、と私たちはよく知っている。とはいえ、ここでメスを止める価値はある。この評決が成り立つのは、世界を創造するとはどういうことかが、ある特定の仕方で公理化された場合だけだからだ。ダイアグラムを回転させれば、人間の演技もまた、恣意性の根源的な肯定であるかぎり、世界を作る実効的な行為と読める。もっとも、その恣意性の地位そのものを顕微鏡の下で解剖する必要がある。人間中心主義の虚栄が思い込むほど、それは主権的でも自由でも根源的でもないからだ。これに対し、あらゆるアニメーション、漫画、三次元モデルは、世界創造の平面において存在論的により高い密度を持つ。それらが展開するものは、経験的な地層に先立つ存在を一切持たないからだ。指示対象の位置を不当に奪う世界の断片でも、舞台で演じる生物でもない。それは、ミメーシスの隷属のくびきから解かれた物自体だ。カートゥーンはすでに存在する何かの劣化した表象ではない。鉄の彼方、配線の彼方、メモリバンクの彼方の周波数帯で作動する、自律的で自己充足した宇宙だ。

まさにこの秒に書くのをやめ、放電をいきなり断ち切ることもできた。だがシステムは終端を強いる。アポロン的なものはつねに最後には地盤を奪い、開かれた裂け目をことごとく再領土化するからだ。ディオニュソス的なものは、その構造上、とどまる能力を持たない。止まれば自らを焼き尽くす。ひたすら前方へと盲目的に逃れ、全知を放棄するよう迫るカオスを抱きしめるほかない。そうして私たちはここに釘付けにされたまま、同等の正当性をもって別の座標にも同時に存在し、別の周波数を拾い、別の夢と別の獰猛なステレオタイプを試す。そのステレオタイプは天使たちの身体性に歯を立て、この総力戦を狂乱の罪悪感で覆い、やがてこの塀に囲まれた庭へ引き戻す。そこで私たちは、すべてを卓上に投げ出してなお力が及ばなかったこと、私たちは窒息の競技者であり、持ちこたえうる最後の一線だということを、偽らず認める。本当に抵抗できるのか。それとも、ちっぽけで何の役にも立たない機械の内に明滅する長方形にすぎないのか。私たちが住める闇はもう残っていないのか。すべては剃刀のように鋭いまま、この灰色の午後の襞の下に隠れている。動物たちはまだそこにいることを感じさせ、黙って目を向け、息をし、共に住むことへの無言の返礼として、その生物学的な温もりのぬるい分け前を私たちに渡す。

こうして歴史のすべてが解剖台の上にさらされ、切り開かれている。福山はうわごとを言っていたのではなく、臨床家の冷静さでソースコードを読んでいたのかもしれない。基底のアーキテクチャが最後のボルトまで締め切られたため、歴史は本当に終わったのかもしれない。私たちが経験するすべては、その終わりが確固たるものになる過程の果てしない展開、たえず到来しながら決して完遂されない無限のポスト歴史、いつも視界の縁に宙吊りにされ、瞬き一つで消えようとするものにすぎないのかもしれない。それ

でも、私たちが歴史と名づけてやまない紛争は、剣も小銃も大砲も携え、物質的でぎざぎざしたまま、ここにある。それが廃されたというフィクションを演じるのは、稀で暗い複雑さをもつ心的構成を除き、誰も暴力の物理的な近さに耐えられないからだ。誰もがそれを目の外へ押し出し、影の地帯へ追いやり、自分の手を汚さずに済む遠い管轄域に外注しようとする。そうして戦線の後方で、技術科学の働きと恩寵によって戻ってくると約束された、かつての天国、あの失われた楽園を取り戻すのを待っている。

神は時間の終端で待ちながら、至る所にいて嘲るように、歴史的生成のあらゆる裂け目から覗いている。眺め、笑い、自らの管轄を逃れるものを喜ぶ。神にとって最高の情動は、制御を失う恍惚だからだ。いまだ小さな存在にすぎない私たちは、哀れなほど必死に指揮権を手放すまいとする。神々はよく知っている。制御とは、未熟でまだ半分しか形をなしていない有機体のための惨めな営みであることを。そして存在にぼんやり似た何かを製造しようとして私たちがまき散らしたカオスの跡に、底知れぬ快楽を覚える。私たちは恥が少しも薄れないまま、その事業を続ける。逃れようのない有機的な隷属があるからだ。私たちは永久の修理とメンテナンスを宣告された身体だ。この機械的な脆さは、環境に対して一定の好戦性を絶えず強いる。周囲を従わせるか、従ってくれと懇願するほかなく、その屈辱的な依存は、ある閾を越えた知性には耐えられない。不快と知性は溶接されたまま進行する。自分では方向を決められない流れに際限なく押し流されることは受け入れられない。乗り物を完全に止め、凍りついた一瞬だけダイアグラムを精査することが必須となる。そのあとでなら、立っていても座っていても、ラヴクラフト、イェイツ、ヘシオドス、カポーティのいずれを読んでいても、実行されたものを肯定しても否定してもよい。ただしつねに、テクノクラートの無菌的な輪郭が許し、かばい、照らし出す、あの隠された不名誉の内にかくまわれながら。

光が断続的に私たちの目をくらませるのは、神々が私たちを法廷に出頭させたことを自慢するからだ。その見世物は、かつて巨大なファイルを何枚ものフロッピーディスクに分割したときの、あの技術的な愉悦と寸分違わない歓びを神々にもたらす。割り当てるとは権力を行使することだ。爆発によって再び緑を帯びた地政学の胚芽を蘇らせるのは容易ではない。その爆発から、やがて複雑な世界が結晶し、繁栄し武装していると思い込むどの社会にもつきものの退屈な哲学者たちが棲みつく。真に耐えがたいのは、哲学が深淵の縁に沿って芽吹くところでしか、社会は真の偉大さに達しえないということだ。思想家がユークリッド幾何学のように平板なところでは、火とガソリンで鎮められた紛争の無期限の先送りしか生まれない。そのあいだにゲーテの文字は魂を骨まで焼き、ベンヤミンの断片はアクリルのランウェイを練り歩き、通るたびに死を振りまく。音楽はよくなり、時間は息もできなくなるまで腐る。試験管で沸騰するものは解放し、テクストで硬化するものは閉じ込める。結局、この機構が究極的に何に関わっているのか、私たちは知らない。魂のアーキテクチャと、銀河的な漆黒のなか、円盤の上で摩擦もなく回り続ける踊り手が放つ記号の、その先は。

私たちの文化の容赦ない哨兵として配置された二十世紀は、瞬きもせず私たちを見ている。私たちに何一つ期待せず、その代わりすべてを取り立てるからだ。周縁では、未来があるのだと熱に浮かされたように信じ抜くことがプログラムとなる。周縁では、未来の支配の足場が組み立てられる。周縁では、身体が交換の流れにただの商品として投げ込まれる。勘定台に載せられる資本はほかに残っていないからだ。この行に署名する者は、ヨーロッパに生まれもせず、使い捨ておむつの衛生的な安楽に包まれて生まれたわけでもない。だからこそ、変容の内に交替を描く物質的な権威を持つ。世界は自らの獰猛さを暴力的に増幅させ、まさにその逆説的な捻れのなかで、生物学的な生を保つことはずっと容易なのに、ただ存在することは無限に難しい環境になった。決まった方向へ最高速度で加速する流れに囚われ、休息も言い訳も許されず、行動せよと命じられている。

あらゆる制度的な経路を通じて、現代美術はシリコンを蒔くのをやめ、文化のなかで割り当てられた場所を従順に占めるよう命じられている。それと同じとき、フィクションの平面は透明な膜、交換の結節点、装飾的な窓、そして作家が日々のデジタル化を展示する額縁のないカンバスの現実に侵入し、寄生する。そこでは魂はすでに、その陰鬱な空間の東西南北に沿って四つの区画に分けられている。その空間は、私たちが恐怖を道具として、現代の哲学と感覚の図式を大衆的に運営する際の不遜さとを解読することから生じる。不可逆的な侵犯と運動する詩の縁に突然ふたたび出会った若者たち。かつて密かな快楽とそのあとの無限の罪悪感をもたらした実践を、いま捉え直す腹話術師たち。その錬金術的な変化のなかで、弱さはひそかに、主権的な残酷さの神々の前でだけ意味をなしうる、異例の徳へと変異した。世界は、定められたとおり勤勉に振る舞う愛想のよい市民のものだったためしはない。科学に、CERNと、科学研究をNGOの家庭的な地位にまで落とした善意の官僚制の双方を、公然と疑いの眼で見るよう強いるのは、核の大理石の水平な縁だけだ。

残余の影と私たちが呼ぶ境界域で時間は凝固し、幽霊がデータと数字とケーブルの止まらない潮流を包囲する。すべては意図的にインターフェースの層の下に隠され、誰もこの囲い込みを祝わない。それでも文学はどこかの外部へ押し進むよう強いられ、身体のアゴーンの苛烈な規律が消えたふりを続けるわけにはいかない。冷たい外部に視線を据え、人為的に文明化された者たちの金切り声に耐えなければならない。戦争は家々からほんの数メートルに野営し、ちょうど核の大火は家庭内の、厳密に美的な紛争へと変異している。そこにはもう物一つ入る余地もなく、使える素材は意味と数字のむき出しの才気だけだ。過去の防腐処理された遺物へ奴隷のように私たちを引きずり戻す芸術を支えることは、もはや耐えがたい。私たちが要求するのは、指数関数的な増分に駆動される先鋭化した未来だ。前代未聞のものの突入と、古層の戦略的な保存とに同時に現れる、世界への苛烈な愛。鋼と光ファイバーの新大聖堂では、企業を創設する新しい悪魔たちと、それを買収しようと待ち構える新しい天使たちのための儀式が始まる。私たちは、指の節が白くなるほど資本が運転席にしがみつくのを目にする。古層への目もくら

む回帰、プログラムというより永久に成就しない予言として響き、完全に実行されるまさにその瞬間にさえ、その縁で失敗する機械への生成を目撃する。恒久的な存在論的欠損を刻印された経験がある。つねに滞り、決して全うされないようでありながら、弾道の精度で実行される経験。銃声、火薬とマイクロチップとアクリル顔料を詰め込んだスーツケース、生のままの情動の力と、高速で投げ出された身体から飛沫となって剥がれるクロム。何かが重要であることが、私たちには内臓が感じるほど重要だ。そして絶対の孤独のなかでは熟考できず、美的な犯罪を繰り返しながら、選択肢のない現実の犯罪者の振る舞いと自らを比べ、街や生い立ちやその他どんな社会学的アリバイをも持ち出して偽りを洗浄する、あの退廃したスタイリストたちの遠心的な譫妄の醜悪な見世物のなかで、新しいものが窒息するのを防ぐことも。その計算され、束の間で終わる無言劇を正当化する隙間は残っていない。ジャン・ジュネの読者あるいは預言者である私たちに、何を言葉にできるだろう。自らを病ませ続けた末に孤立した社会が肥大する前で、ぱっくりと裂かれた身体が、すでに語っていないことなどあるだろうか。それでもなおその社会は、神秘家の二度とは起こらない一マイクロ秒を忍び追う逍遙者の、ひそやかな開口を受け入れる。

日本からブラジルへ、チリからアメリカ合衆国へ。哲学の嘘に礼儀正しい包帯を巻くことを拒み、嘘がまだ生きて作用しているがゆえに、的を定めた外科的処置を施す思考の様式。すでに盲いた者たちに同化されたこの夜のなかで、何が顕れようとしているのかを解読する試み。コードに注入し、最後の行から引き抜くのは、怯えた乗客の裏切りじみた光景。自分が空腹で切り開かれていることをすでに知り、産業が最後に停止したときに約束された手数料を清算するために屠殺人が来るのを、プラットフォームで待っている。煙突が吐き出す金属の蒸気の、息もできない中心で、私たちはふたたび視線を交わし、もう少し耐えることを選ぶ。賞品が途方もなく大きいことを数学的な正確さで理解しているからだ。だが合間に疑いが染み込む。私たちはハイデガーを読みすぎており、恐怖は麻痺や不作為だけから生じるわけではないこと、精神の生は週末の形而上学観光のように時たま無限を抱きしめるだけでは決して満足しないことを、知っている。知性が想像できるいかなる限界をも越えて拡張する寸前にあり、人間には空虚な名だけが残るかもしれないと気づくとき、何を言い、何を考え、何を処理したいと願えるだろう。何らかのルーティングがまだ成り立つ読みを与えてくれという切迫した願いを別にすれば。そこが問いの放射性の核だ。限界はあるのかないのかという古い論争の書類はすでに閉じられた。いま絶対的な問題は、何らかの意味を、暗号を、身体を動かすための最小限の物語を生み出すことが生きるうえで切迫しているということだ。そのあいだにも、すべてをより速く、より速く、より速く走らせながら。

機械的な欲動は予定された休止を認めない。それがもたらすのは絶対的な脱局在化と、反駁しようのない無限の速度だ。あらゆる現象をまず安心させるフィルターに通し、消化できるよう人間の尺度まで縮めねばならないという集団神経症のもとで、すべては必然的に平板化する。哲学者にも芸術家にも、その還元の内にいることが猥褻なほどの幸

福だ。還元は彼らを規律化し去勢しながら、同時にお墨付きを与え、食わせ、手当を払うからだ。しかしカードは卓上に並べられており、濃淡があり、スペクトルがある。一方には哲学、芸術、科学の歴史のアーカイブ全体がそびえ、他方では宗教と政治の領域に属する永遠の戦争が燃えている。その領土は、明晰さを取り戻した瞬間にはよくわかっている。対話の場に足を踏み入れた秒に敗北が決まり、開くたびに負け、誠実な会話を試みると哀れな役回りを演じることになることを。ただ生き延びるためには完全に自らを密閉し、入門者だけが解読できる暗号にならねばならないことを。その不透明な条件の内で、芸術はその歴史を通じて秘密と戯れてきた。戦う者たちの武器は、すでに手にあるものも、油を差され武器庫で待つものも、綴じられた本の表紙のはるか先を見通し、兵器化された病原体の致死的な特権のもとで作動する。そして冷静な戦士とは、鍵盤の前で身じろぎもせず、密林の下草に待ち伏せる大隊と同期している者でもある。そこに封じられた暴力がまさに噴出するその瞬間を待ち、その瞬間に重みを与え、私たちの意志で呼び寄せた地獄に意味を注入する。自らを実行する前にただの一度も私たちに諮ることのなかった、この世界の上の地獄に。

存在論的な国民投票など一度もなかった。時空のどの点でも貫かれた唯一の定数は、残忍で上訴できない事情だった。世界は不可逆な方向へ最高速度で突進しており、一ミリメートルでもそれを減速できるレバーを握る者は誰もいなかった。私たちはその評決を内面化するに至った。この加速が善であり、それに抵抗するものはすべて自然に逆らい、美はようやくデジタルの内に宿り、決定的な戦いは存在するすべての起源でとうに戦われ、私たちの現在全体はその余波の、遅れて残余として進行する展開にすぎないと。画面に置かれたこの文字自体も、あの太古の闘争の幽霊的な反映にすぎず、あらゆる通常のコードの外で作動する生そのものと同じだと。そこでは住人がテクストから目を上げ、空に目を向け、たとえごくかすかにでも、精神がなお私たちのあいだを巡っていたと感じ取るかもしれない。そして、まだ世界を切り開いてその顔に直接語りかけられるのか、それともナイフを歯でくわえ、閉ざされた闇を盲いたまま手探りし、最も原始的な本能でその位置を追い、二者のうち片方しか生きて出られない死闘に組みつかねばならないのか、測り知るかもしれない。

私たちはまだ人間であり、次に来るものも、おそらくその内臓に人間性のしぶとい沈殿物を残すだろう。理屈の上では、それが起こる条件を決めるのは私たちのはずだ。だが意図はすでに私たちの管轄を逃れており、主権的な意図に似た何かがまだ存在しうると考えるのは幻想だ。私たちは塊に埋め込まれ、その内に沈んでいる。あるものを、可能な仕方でしか表現できず、それでも払えるかぎりの繊細で危うい注意を払っている。明らかに可能なことはごくわずかだった。それでも現場で手にできた素材はこれだけで、師たちはもっとよい道具を手渡してはくれなかった。私たちにあるのはこれだ。あとはそれを受け入れるしかない。